

学園だより

吉備国際大学 学生 市長訪問

高梁学園広報室 山本武生

訪問日時：11月24日11：00～11：30

場所：高梁市役所

訪問者：吉備国際大学 社会福祉学部

健康スポーツ福祉学科 2年 松田真理子さん

青木 奏 恵さん

臨床心理学科 2年 山田奈穂子さん

山崎丘美子さん

学園で作成している「サンプル」3校合同プレス取材で市長への訪問を企画しました。サンプルは、吉備国際大学・順正短期大学・順正高等看護専門学校に資料請求を予定した高校生や予備校生など約10,000人に年間5回の予定で発送しているダイレクトメールです。今回で第4号。

学生は緊張しながらも「楽しもう!」と意気込んで市役所に入り応接室で市長の名刺をもらって、まず感激。市長になってどんなことが変わりましたか?という質問に、市長は「とにかく忙しくなりました」と第



一声。「成羽町長の時も忙しかったですが、とにかく合併後、面積が岡山県で一番大きな市となった高梁市なので行動範囲が広く、就任後まだ一日も休みがないんですよ」と笑う市長に、学生は「少しゆっくりしてくださいね」と市長を気づかうシーンもありました。

市長は大学生時代、お金を貯めて安宿をはしごするような旅行によく行ったそうです。北海道から九州まで、ほとんど全国を旅行したことが学生時代のいい思い出だそうです。「学園文化都市高梁を実現するためには、学生が他の町から来るだけではダメです。学生と市民そして行政が、お互いにジョイントしなければ実現しません。そのような場を提供するのが私の役目なのかも知れませんね。」と最後に締めくくられました。

市長には大変お忙しい中、お時間をいただきありがとうございました。今後、学生たちと一層の交流を図っていただけることを期待出来る時間となりました。

がんばるっ子



思いをこめて!カレンダーづくり 吹屋小学校(成羽町吹屋)

創立105周年の吹屋小学校は、現役の木造校舎としては国内で最も古いといわれており、県重要文化財に指定されています。全校児童10人のこの小学校では、木版画のカレンダーづくりに取り組んでいます。昭和58年(1983)高学年の図工の時間に、民話を題材につくったのは始まり。翌年から自慢の校舎や学校行事、地域の伝統的な建造物群、備中神楽といった自分たちの身の回りのものに題材を変え、現在まで引き継がれています。



業者や土産物店などから譲ってほしいと声がかかるようになってきました。これをきっかけに、部数が増やすために保護者も加わり、平成9年(1997)からは、PTA活動として親子で制作しています。6月ごろには絵柄を決めて、各家庭で彫りはじめます。7・8月に彫ったものを持ち寄り、出来具合を確認し、10・11月にかけて夜、親子で学校に集まって手刷りの作業をします。5年生の平岡美友紀さんは「日曜日の色は赤色だよ。まちがわないようにね」と下級生にアドバイス。「がんばって上手にできたら、みんなほめてくれるのでうれしい」と4年生の丸山恵里さん。平ノ内一夫校長は「親子共同作業で保護者ほどの子にもわが子のようにかわります。保護者同士の連帯感も強く、子どもたちは地域の皆さんに見守られながら育っているように思います。また、古い校舎で過ごすことは、美術品の中にあるようなもの。この環境が子どもたちの創造力をかきたてているのかも知れません」と話しています。



業所や土産物店などから譲ってほしいと声がかかるようになってきました。これをきっかけに、部数が増やすために保護者も加わり、平成9年(1997)からは、PTA活動として親子で制作しています。

わたしの健康づくり

「いい汗かいていますか?」



うしろうち 後内 久雄 (備中町東油野)

「走る事が大好きなんです」と、ジャージ姿でストレッチ体操をしながら話す後内久雄さん(60)。大阪から備中町へUターンして3年半。週1回のペースで、地元の自然を満喫しながら気持ちよく約10キロの道のりを走っています。

「はじめは、お医者さんに勧められて走りはじめたけど、気づいたら走ることが楽しみになって、今では記録へ挑戦するようになってねえ」と嬉しそう。フルマラソンに35回出場し、「吉備路マラソン」や高梁で行われる「愛らぶ高梁ふれあいマラソン」にも毎年出



場しています。また、健康面から地域に何か貢献できないかと、「備中町健康なまちづくり応援団」の一員として活動しています。様々な趣味や個性をもった気のあう団員と一緒に「歩け歩け大会」に参加したり、市が実施する保健行事へ参加したりしています。「地域を越えた交流や活動をしてみたいし、子どもや障害を持たれた方も一緒に活動できるような場をつくりたい。そのためにはまず自分が健康じゃないとね。」と意欲満々。「これからジョギングやマラソンのシーズン。皆さんも身近な自然を肌を感じながら走って、いい汗をかきましょう。体も心もリフレッシュできますよ。でも、走られるときは事故やケガには十分注意してください」と話しています。

編集後記

平成16年も残りわずかとなりました。今年には新生高梁市が誕生し、まさに記念すべき激動の年でした。旧高梁市の広報紙「最終号」、そして新市「創刊号」に携わることができ、何かにつ

ら、親子二人三脚でがんばってこられたお話しを伺ううちに、メモを取る手も止まるほど、感銘を受けました。わが家にも3人の元気ボーイがいますが、なかなか子どもたちにかかわることができず、反省しています。来年は四年。より充実した「広報たかはし」を目指し小さな羽根をばたつかせながら各地域を飛び回りますので、よろしくお願ひします。(NK)

注目



駒澤大学4年 田中宏樹さん(21) (川上町地頭)



日本大学駒伝(11月7日)で力走する田中選手

お正月の風物詩ともいえる「箱根駅伝」(正式名称「東京箱根間往復大学駅伝競走」)。毎年、全国のテレビの前のお茶の間を魅了します。選抜抜かれた15大学の選手たち150人が、母校の名誉と自己実現のためにタスキをつなぎ走る姿は、見ている人にも勇気と希望を与えてくれます。川上町出身の田中宏樹さん(駒澤大学4年生)は、この箱根駅伝で4年連続の総合優勝を目指し、名門「駒大」のキャプテンとして戦いに備えています。田中選手は、1、2年生の時は、通称「山登り」(標高差775M)といわれ、他の駅伝には類のない箱根駅伝最大の見どころの第5区を、3年生の時には、チームのエース的存在として第4区に出場し、区間賞となる見事な快走を披露しました。11月7日に行われた箱根駅伝の前哨戦(全日本大学駅伝)では、4区を走り、見事区間賞を獲得、選手層の厚い駒澤大学は他の追従を許さず、独走で優勝を飾りました。実家のお母さんは「小さい頃から負けず嫌いで、雨の日も風の日も、努力努力の子でした。今が正念場でしょう。最後の箱根を楽しんで走ってもらいたいです」と話しています。練習の合間に、田中選手から届いた便りには「今年は自分のことよりもキヤプテンとしてチームのことを考えなくてはなりません。全日本大学駅伝後にも合宿を行い、疲労はピークですが、やるしかない」という気持ちでいっぱいです。何区を走るかはまだ決まっていますが、必ず勝つて卒業したいと願っています。応援よろしくお願ひします」と計り知れない熱い思いを感じさせる言葉が記されていました。新春、1月2日・3日の両日には、箱根を駆け抜ける、郷土の誇り 田中選手 に注目です。